

国立民族学博物館の収蔵品 ②③

ブータンのテント



展示場に立つ夏营地用テント



子ヤクとブルーシートの小屋掛け
(ハ県チェ・ラの西、2013年11月)

テントを見ると何かしら心が躍り、なかを覗きたい衝動に駆られな
いだろうか。それはまるで、定住前の人類の長い遊動生活の記憶が呼
び覚まされるかのようだ。ヒマラヤ高地の牧畜に傾斜した生活を紹
介しようと、新しくなった南アジア展示場にヤクの毛で織られたテント
を展示した。二〇一三年の夏まで、ブータン西部ハ県の標高約四五〇〇
mの夏营地で使われていたもので、同年秋にブータン研究者の宮本万
里氏（慶應大学、当時民博）の協力を得て収集したものだ。

テントは幅二〇、三〇、四〇cmの生地を裁断した長短様々のパター
ンを、ヤクの毛糸で縫い合わせて立体的に作られている。仕上りの
サイズなどを考え、幅が異なる生地を使い分けてパターンに裁断する
技能をもつ人（設計者）は、ハ県には数少なく、早晩こうしたテント
は消失しそうだ。現に村から夏营地までの移動時はブルーシートの小
屋掛けが用いられており、テントは夏营地の岩陰に放置してあるので
ある。ヤク飼いとってテントは家と同じくらい大切だ。それ故テン

トを注文すると、その設計者には家の建築士に支払うほどの謝礼をす
るそうだ。その点でもテントは特別な意味合いをもつ。

生地はごわごわして目が粗く、脱脂もされていない。そのため僅か
に光を通し、通気性があって蒸気は逃がす一方、防水性が高い。テン
トは高さ四〇五〇cmの丸く組んだ石垣（展示では再現せず）の上に立
て、末端の四三本の紐を木杭に結んで固定する。支柱は六本あり、二
本が棟木を支え、四本に張り綱がかけられる。この紐の多さと独特の
形から、俗にスパイダー・テントと呼ばれる。テント中央には炉が切
られ、床には保温材として木の葉が敷き詰められる。展示ではテント
内に乳製品の加工具や脱脂乾燥チーズのレプリカなどを配したが、忠
実な再現ではなくイメージ展示になる。

ヤクの飼育は乳をバターやチーズなどに加工して売ることを目的と
する。必然的に家畜群にはメスが多く、オスは肉として売買される。
ヤクのバターはチベタン・ティーに欠かせず、高値で取り引きされ
る。それでもヤク飼いは減少の一途にあるとい
う。ヤクを飼うには季節に応じ標高の異なる草
地を用いる「移牧」を行わなければならない。子
どもの学校問題など支障が少なくないからだ。
ヤクを飼い続ける家族は、意外にも金持ちで牧
夫を雇うだけの余裕があったりする。

収集で最後に問題となったのは重量超過だ。
テント本体の重さは四二kgあり、他の収蔵品と
合わせ、荷物は六六kgになった。日本の国立博
物館でブータン文化を紹介するためだと、国営
ドゥルック・エアのCEOに便宜供与の依頼状
を書いたところ、超過手荷物料金を免除してく
れた。乗便の他社が追徴するかまでは関知し
ないとされたが、幸いそれもなく、空港のター
ミナルにテントが転がり出てきたときには
快哉を叫んだ。展示場の謝辞パネルにドゥルッ
ク・エアが載る所以である。（南 真木人）